

二〇二五年度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国語 (六〇分 一〇〇点)

受験上の注意

- 一 開始のチャイムが鳴ったら、問題冊子の全てのページがそろっていることを確認して、解答を始めなさい。
  - 二 問題冊子は1ページから23ページまであります。
  - 三 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に記入しなさい。
  - 四 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 終了のチャイムが鳴ったら、解答をやめなさい。
- 解答用紙は、問題冊子の上に開いたまま裏返して置きなさい。

〈解答は、句読点や記号も一文字分と数えて記入すること〉

受験番号



【問題は次のページから始まります。】

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本人は自然を尊び愛する気持ちが強い、とよくいわれます。ところが、<sup>①</sup>その自然とは何かをつきつめて考えると、一定の生物種や美的に重要な自然界の個々の対象に焦点を合わせたものなのです。

二〇一〇年三月に倒れて話題をよんだ、鎌倉市の鶴岡八幡宮<sup>はちまんぐう</sup>の大イチョウがいい例でしょう。鎌倉幕府の三代将軍源実朝<sup>さねとも</sup>が八幡宮の参拝を終えて石段を降りてきたところ、このイチョウに隠れていた二代将軍源頼家<sup>よりいえ</sup>の子、公暁<sup>くぎょう</sup>に暗殺されたという伝説から「隠れイチョウ」とも呼ばれている樹齢八〇〇〜一〇〇〇年の大イチョウが三月一日早朝、突然倒れたのです。さいわい根元から芽が出たので、大イチョウの再生を祈願するため八幡宮の神職や巫女<sup>みこ</sup>の計八〇人と一〇〇〇人にもおよぶ参拝客が参加して、神事が行われました。

春のお花見にしても、サクラの花咲く公園や<sup>a</sup>堤<sup>つみ</sup>の全体が春らしくなってくるのを楽しむのではなく、サクラだけが<sup>b</sup>カンシヨウ<sup>かんしやう</sup>の対象ですね。在来の野草を楽しむ場合も、同じ傾向が見られます。<sup>A</sup>、京都・蘆山寺<sup>ろざん</sup>のキキョウの写真を見る限り、庭にはキキョウとコケしか生えていないように見えます。野草の多様性を楽しむための寄せ植えでさえ、それによって利益を得るという発想で、人目を引きそうな草花だけを選んで植えたくなるのです。こうした日本人の行動は、自然に対する人間中心的な考え方に基づいており、これは、二〇世紀にノルウェーのアルネ・ネスを初めとするヨーロッパの環境学者たちによって提唱されたデープ・エコロジーの考え方とは対極です。<sup>②</sup>彼<sup>かれ</sup>らはこのように考えます。自然界における全ての生命存在は固有の価値を持っていて。そしてこれらそれぞれの固有の価値は例外なく尊重されるべきである。だから、人は自然界における全ての命を平等に扱わなければならないと。日本人の自然に対する考え方と、このデープ・エコロジーの考え方はかなり異質なものです。

モンスーン気候帯に位置する日本は、四季折々の美しい自然と接することができます。<sup>B</sup>、台風<sup>たいふう</sup>に代表される暴力としての自然が襲いかかってくることも珍しいことではありません。日本人は絶えず自然の脅威にさらされ、それを克服することができます。

ず耐え忍んできたので、自然を神として崇拜せずにはいられなかったのです。だからといって、<sup>③</sup>自然の全体を尊重していたわけではありません。古代日本人の自然崇拜は、稲作を中心に年々くりかえされる営みの中で、村人たちの守り神として祭られた自然の中に取りました。米作りをする農民の生活に強く関わる雨、雷、台風などの自然現象や、神霊が宿ると考えた大木、奇岩などが祈りの対象となりました。鶴岡八幡宮の大イチョウは国の天然記念物ではありませんが、今でも大イチョウという特定の生物に思い入れが強いのは、そこに神が宿っていると考えたくなるからでしょう。<sup>④</sup>日本人に特有の自然崇拜とか自然を愛する心から始まった生物の保護は、生態学の視点からの生物多様性（種の多様性）保全の考え方とはかなりかけはなれているのです。

日本には約五五〇〇種もの高等植物（シダ植物、裸子植物、被子植物からなる維管束植物をさす）が分布しています。しかし、日本人は特定の植物種や個体に対する関心が強いあまり、逆に緑とか草とか雑草として認識されてしまったら最後、その植物は多様性の要素になりにくいという面があります。一度、雑草のグループに属することにもなれば、在来種であっても、ほとんど考えることなく排除の対象にさえなるのです。

ではどうすれば日本の在来植物の多様性をとりもどすことができるのか。私は個々の人間に固有の「<sup>⑤</sup>環境世界」を拡大する可能性を大きくもつ、若いみなさんのパワーに期待せずにはいられないのです。

ヤーコプ・フォン・ユクスキュルは『生物から見た世界』という非常にユニークな本の中で、個々の生き物（主体）が知覚できる全てのものと、その主体の行動を一つのまとまりのある統一体として捉え、これを「環境世界」と呼びました。そして、この環境世界はものを感じ、行動する主体によって異なることを強調したのです。

彼はその本の中で、同じ空間で、人間とイヌとハエではその捉え方がそれぞれ異なることを一つの絵を用いて紹介しています。

<sup>⑥</sup>絵の中にはテーブルの上に乗ったワイングラスやお皿、食べもののほか、椅子やソファ、本棚など、人間の暮らしのワンシーンを表すものたちが描かれています。私たち人間にとっては、部屋の中のもの全てが違う意味を持つものであり、それぞれ違う色がついているかのように認識します。では、この部屋にイヌが入ってきた場合、同じ空間をどう捉えるのでしょうか。

椅子やソファは、飼い主である人間が座るもので、その匂いが感じられたり、自身も寝そべったりするので必要なものです。また、テーブル自体には興味がありませんが、上に載っている食べものや飲み物には関心があります。一方、本や本棚は全く意味がないものだとみなされるでしょう。

C、一匹のハエが入ってきたとしたらこの空間をどう捉えるのでしょうか。ハエにとって関心のあるものは食べものだけです。椅子やソファ、本棚などはハエにとって全く意味のないものです。食べものは食べものとして認識し、あとのものは無きに等しいものとして認識します。このように、生物が環境をどのように認識しているかによって、そこにあるものは変わらないのに、全く違う世界が生まれるのです。

また、本の ボウトウ に書かれているマダニの話も有名です。木の上に生息するマダニは、視覚や聴覚を持ちません。しかし、嗅覚を頼りに下を通りかかる哺乳類から酪酸の匂いを感じ、木から落ちます。鋭敏な温度感覚によって、温血動物の上に落ちると、そこから触角を働かせ、なるべく毛のない所へ移動し、その動物の血液を吸い、自身の体内に取り込みます。つまり酪酸、温度、液体（血液）の三つさえあれば生きるために必要なものは満たされ、子孫も残せるため、花が咲いていようが、鳥がさえずつていようがマダニには関係ないのです。

人間が主体の場合でも、<sup>⑦</sup> きこりと少女 では、その環境世界に描かれるカシワの木の姿はいちじるしく異なります。森のどの木を切り倒すべきか決めかねている年老いたきこりの環境世界の中では、斧で切り倒されるカシワの木は大きさが問題であり、それを知るために正確な幹の太さを測ります。一方、少女にとっては森は小人や妖精が住んでいて、カシワの木が恐ろしい顔で自分を感じと見る、こわい悪魔になってしまうのです。

日本人の場合、少女がカシワの木を恐れたのと同じ感覚で、鶴岡八幡宮の大イチョウを 畏敬 の念で見えていたのです。だからといって、全てのイチョウに霊が宿しているとは考えません。またイチョウ、マツ、サクラ、ウメというように、個々の名前がわかる植物の数が驚くほど少ないのです。名前を知らないその他の植物は環境世界の背景としての緑であり、造花でもあまり違和感を

覚えなさい。なぜそうなってしまったのか、私には二つの理由が思い浮かびます。

一つめは、国民が個々の（生物・植物）種とじかに接触する機会が非常に少なくなったことです。私たちの祖先は農耕民族でしたから、数多くの草や木と、たとえ名前はわからなくても常日頃から接していました。しかし、近年は日曜農業でも米作りができるようになり、朝飯前の田まわりなどしなくなれば、農業をやっても昔にくらべて自然との接触が少なくなります。まして、都会人ならなおさらでしょう。

二つめは、小・中学校の教育の中で植物の名前を覚える機会が非常に少ないことです。ある小学校の先生の話では、日本の教科書に登場する植物の数が少なすぎることでした。せめて春や秋の七草や俳句の季語になる草木の名前ぐらいは、含めるべきだと思います。大人になってからは、なかなか覚えられないものはありません。

現代人の環境世界に描かれる植物的な要素が小さくなっていく今、生物多様性の保全をいくら ウツタえたとところで、頭で理解できても、それを守るといふ行動までには至らないでしょう。より多くの若いみなさんの環境世界の中で植物的要素が拡大すればするほど、生物多様性を保全するための行動力はより強固なものになるのです。

（根本正之 もとただし 『日本らしい自然と多様性——身近な環境から考える』より）

問一 〜〜〜〜線部 a e のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。（漢字は楷書ではっきりと書くこと。）

問二 本文中の A 〜 C に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア さらに                    イ しかし                    ウ たとえば                    エ だから                    オ つまり

問三 ー 線部①「その自然」が指す内容を「〜自然。」に続く形で、本文中の言葉を使って十字以内で説明しなさい。

問四 ー 線部②「彼ら」が指す内容を本文中から抜き出して答えなさい。

問五 ー 線部③「自然の全体を尊重してはありませぬ」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 自然の全体を尊重していたわけではないのは、日本人がどのような考え方を持っていたからですか。本文中から十五字で抜き出して答えなさい。

- (2) (1)の考え方は逆の「自然の全体を尊重する考え方」とはどのようなものですか。本文中の言葉を使って七十字以内で説明しなさい。

問六 —— 線部④「日本人に特有の自然崇拝とか自然を愛する心から始まった生物の保護は、生態学の視点からの生物多様性（種の多様性）保全の考え方とはかなりかけはなれているのです」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明したものと、して最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本人の生物保護は、三代将軍源実朝の暗殺に登場する鎌倉市の鶴岡八幡宮の大イチョウのように、歴史的な背景を持つ特定の生物種や自然物だけが対象となるから。

イ 日本人の生物保護は、特定の草花だけを取り入れた寄せ植えのように、人目を引き、経済的な利益をもたらすものだけを対象とする発想に基づいたものであるから。

ウ 日本人の生物保護の原点には、稲作を中心とした古代日本人の営みがあり、米作りをする農民にとって、じやまになる生物は排除されるべき対象となってきたから。

エ 日本人の生物保護の原点には、モンスーン気候帯に位置するという地理的条件が関わっており、台風などの脅威を克服してきた強靱きょうじんな自然物だけが崇拝されてきたから。

オ 日本人の生物保護の原点には、一定の生物種や美的に重要な対象だけを取り上げ、特定の自然現象や生物を尊重する古代日本人の自然を愛する心や自然崇拝があるから。

問七 —— 線部⑤「環境世界」を説明した部分を「く捉えたもの。」に続く形で、本文中から五十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。（ただし、記号や符号も一字で数えます。）

問八 ——— 線部⑥ 「絵の中にはテーブルの上に乗ったワイングラスやお皿、食べもののほか、椅子やソファ、本棚など、人間の

暮らしのワンシーンを表すものたちが描かれています」とありますが、「テーブルの上に乗ったワイングラスやお皿、食べもののほか、椅子やソファ、本棚など」の人間の暮らしに必要なものに対する人間・イヌ・ハエの捉え方の違いについて説明した次の1〜4について、正しいものは○を、間違っているものは×をそれぞれ書きなさい。

- 1 本と本棚は人間にとってしか意味を持つものとして認識されない。
- 2 ソファとテーブルはイヌにも意味を持つものとして認識される。
- 3 空のワイングラスはハエにも意味を持つものとして認識される。
- 4 食べ物は人間・イヌ・ハエ全てにとって意味を持つものとして認識される。

問九 ——— 線部⑦ 「きこりと少女」とありますが、「きこり」と「少女」の例によって筆者はどういうことを言おうとしているのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間以外のイヌ・ハエ・マダニの環境世界と、人間の環境世界とは大きく異なるということ。
- イ 同じ生物種であっても、ものを感じ、行動する主体によって、環境世界は異なるということ。
- ウ 人間が主体の場合は、年齢が異なれば、もの感じ方や見え方は変わってくるということ。
- エ 森に存在する古い大きなカシワの木には、霊的なものが宿っている場合があるということ。
- オ 偏見を排し、一つの対象について多様なものの感じ方や見方をすることが大切だということ。

問十 ――線部⑧「都会人ならなおさらでしよう」とありますが、これをわかりやすく言い換えた次の文の「」に入る適切なことを答えなさい。

都会人ならなおさら「

」でしよう。

問十一 〓線部「ではどうすれば日本の在来植物の多様性をとりもどすことができるのか」とありますが、日本の在来植物の

多様性をとりもどすためにするべきことは何だと筆者は考えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 教科書に登場する植物の数を増やして、春や秋の七草や季語になるような植物を学び、古典文学や俳句などの日本古来の文化を大切にしておくこと。

イ じかに植物に接したり、植物の名前を覚えたりする機会を増やすことで植物に広く関心を持つようにして、私たちの環境世界の中で植物的要素を拡大させること。

ウ 雑草と認識している植物を排除したり、私たちの生活を豊かにするために森林を伐採したりすることをやめて、古代の形の自然に近づけること。

エ 大イチヨウの再生を祈願するために盛大な神事が催されたように、木々に宿る神霊を大切にし、自然に対して畏敬の念を持って接したり扱ったりすること。

オ ユクスキュルの『生物から見た世界』を読んで環境世界への理解を深め、イヌやハエなどの人間以外の生物がどのように環境を認識しているかを知ること。

【二】 次の小説は、恩田陸『夜のピクニック』の一節である。西脇融にしわきとおると甲田貴子こうだたかこは同じ高校に通う三年生で、異母兄弟の関係にある。これまで互いに話す機会を持たず、ぎくしゃくしており、友人にも二人の関係を話さずにいた。次の文章は、高校生活最後のイベントである「歩行祭」が終わりにさしかかった頃に、二人の関係が友人たちに知られ、融と貴子が二人だけで歩くことになった場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「※あんな杏奈ね、あたしたちに仲直りしてほしいと思つてたみたい。仲直りつていうのもヘんな言葉だけど」

「ふうん」

なんとなく、二人で黙り込む。

いつのまにか、国道から聞こえてくる車の音が大きくなっていった。慌ただしい日常が、一時停止ボタンを押していた現実が、すぐそこに迫っている。

そのことに気付いた貴子は、自分が動揺していることに気付いた。

もしかして、今だけなのでは？ こうして融が素直に自分と話してくれるのも、歩行祭という、いつもと違う浮かれた世界が与えてくれた魔法なのでは？

そんな、<sup>①</sup>根拠こんこのない不安が込み上げてくる。

繋つなぎ留めておきたい、この時間を。このままずっと。

不可能だと知ってはいいても、貴子はそう願わずにはいられなかった。

「世の中には、暇でおせつかいな奴やつが結構いるんだな」

貴子の悲痛な気持ちなど知らずに、融はのんびりとつぶや呟く。

「うん」

貴子は動揺を押し殺しながら、<sup>a</sup>生返事をする。

彼の言葉が、杏奈や美和子や忍やら、貴子たちが二人きりになれるよう気を遣ってくれた友人たちのことを指していることは分かる。だが、貴子はそんな人ごとのような台詞を吐く融を、<sup>②</sup>密かに恨めしく思った。やはり彼は、それを当然のこととと思っているのだろうか。無償の愛を当たり前のことと思っっているのだろうか。自分が、内堀亮子や彼の<sup>b</sup>歡心を買おうとする他の女の子たちと大して変わらないような気がして、貴子は急に惨めになった。

「<sup>さかき</sup>榊って、<sup>※</sup>スタンフォードに行くんだって？」

「うん」

「あんな、見た目はポーツとして、勉強できるって顔してないのに、賢いんだなあ、あいつ」

融は不思議そうな声を出した。

そう、杏奈は賢いのだ。貴子は心の中で呟く。

結局、一度もあたしたちと言葉を交わすことなく、海の方こうから弟を送り込み、こうしてあたしたちを並んで歩かせているのだから。

さつきまでそのことに感嘆し、感謝していたのに、なんだか今ではそれも恨めしかった。せつかく融と口をきけるようになったことが、<sup>③</sup>新たな憂鬱の始まりのような気がして、貴子は怖くなったのだ。

鬱々とする貴子の隣で、融は全然違うことを考えていた。

彼の中で、世界はますます広がっていた。みるみるうちに地平線が遠ざかり、海を超え、遠い世界がうつすらと見えてくる。

不思議な感覚だった。

融は、自分が世界に包まれているような気がした。

自分がああ、榊杏奈という少女を、彼女が残していった空気を、そして彼女に連なる<sup>ゆさ</sup>遊佐美和子や甲田貴子といった少女たちをず

つと愛していたことを悟ったのだ。

愛していた、という言葉など馴染みがなく、この先使うこともそうそうあるとは思えない。しかし、他に当てはまる言葉が見つからなかった。

彼はこれまでそういったものを拒絶してきたし、見ないふりをしてきたつもりだった。それは成功しているはずだった。

けれど、それでもやはり、彼は心のどこかであの少女たちを愛していた。誰かを個人として、恋愛対象として愛していたのではなく、彼女たちの存在そのものに、彼女たちが自分に感じさせてくれる空気に、強く惹かれ、焦がれていたのだ。

俺ってほんとに馬鹿だったな、と融は素直に思った。

忍が夜中に怒ったような顔で喋ったことや、遊佐美和子が正面から彼をなじったようなことも、本音を言えばあまり自分のこととして受け止められなかった。なぜ彼らが真剣に自分にそんなことをぶつけてくるのか不思議に思ったほどだ。

だが、正しいのは彼らだった。脇目もふらず、誰よりも速く走って大人になるつもりだった自分が、一番のガキだったことを思い知らされたのだ。

そして、彼らは融よりもずっと寛大だった。一人で強がっていたのに、彼らは融のことを愛してくれていた。いつも離れずそばについていてくれたのだ。

④ 融は自分が情けなく、恥ずかしくてたまらなくなかった。

「——もっと、ちゃんと高校生やつくんだったな」

融は思わず呟いていた。

「え？ 何？」

貴子が振り向く。

「損した。青春しとけばよかった」

「何、それ」

「愚痴」

貴子は、本気で後悔している表情の融を見て、沈んでいた心のどこかが動くのを感じた。

忍の声が、唐突に脳裏に蘇よみがえる。

なんて言うんでしょう、青春の揺らぎというか、煌きらめきというか、若さの影、とでも言いましょうか。忍の冗談めかした声と、つまらなそうな顔の融とが重なりあった。

ひよっとして。

貴子は融の顔をじっと見つめた。やけに無防備な、子供のような不満顔を。

今ごろになって感じてるわけ？ そういうものを？ 今更、この男が？

⑤ 貴子は、あきれて笑い出したくなった。

この男は、落ち着いていて偉そうに見えるが、実は、とんでもなく不器用で真面目なのだ。

「ちゃんと青春してた高校生なんて、どのくらいいるのかなあ」

貴子はぼそつと文句を言った。

融がムツとしたように貴子を見る。

「甲田は青春してただろ？ 芳岡とつきあってるんだろ」

「違うよ、全然。ただの茶飲み友達」

貴子が一蹴したので、「またあ」と融は言った。貴子は苦笑する。

「あのね、芳岡君は、学者様なの。あたしたちの喋ってる内容って、星の動きの話とか、家族構成と顔の話とか、そういうとても高尚で上品なお話なの」

「——だよな。俺もあいつ知ってるけど」

⑥ 融は納得した。実は、学究肌の芳岡と貴子というのは、恋愛感情の匂いのしないおかしな組み合わせだと思っていたのだ。なんだ、やっぱそうか。

「あたしなんか、部活もしてなかったし、勉強も今いちだし、何も起きない、冴さえない高校生だったよ」

「そういうもんかね」

「大部分の高校生がそうなんじゃないの」

「そうかなあ。他人は青春してるように見えるんだよな」

「でも、今、してるじゃん」

「え？」

融がきよんとすると、貴子は小さく笑った。

「これって、凄すごく青春ぼくない？ 高校生活最後の行事。歩行祭の、一番終わりの頃になって、ようやくこれまで口きいたことのない、憧れのクラスメートと話してる」

融は絶句したが、つられて笑った。

「だな。しかも、腹違いのきょうだい。超※メロドラマ」

「青春じゃん」

二人で自虐的な笑いを漏らす。

「じゃあ、ドラマならこの先どうなるんだろ？」

融が呟くと、貴子は考え込む。

「歩行祭の終わりと一緒に、ドラマも終わりだよ。きっと、この世でたった二人きりのきょうだいなんだから、これから助け合っ

て生きていきましようって、美しく微笑ほほえみあって約束するところで終わりなんじゃない？」

「なるほどね。二人の母親が一緒に迎えに来てて、涙流して仲良くなっちゃってたりして？ ドラマはいいところで終わるからな」

融は、ふと真顔になり、遠くを見た。

「でも、現実には、これからだもんなあ」

貴子は融の視線の先を見た。

世界に光が降り注ぐ。

ぞろぞろ歩いていく友人たち。埃ほこりっぽい道。近づいてくる街の喧騒けんそう。

しかしその時、二人は見えないものを見ていた。

⑦ 目には見えないが、全く同じものを。

これから先、二人を待ち受ける長い歲月。言葉を交わし、互いに存在を認めてしまった今から、二人の新しい関係を待ち受ける時間。もはや逃げられない。一生、断ち切ることでできない、これからの関係こそが、本当の世界なのだ。

それが、決して甘美なものだけではないことを二人は予感していた。

この関係を疎ましく思い、憎く思い、やりきれなく思い、関わりたくなく思う瞬間が来ることを二人は知っていた。それでもなお、互いの存在に傷つき、同時に励まされながらも生きていくのであろうことも。

二人は無言で歩いていた。

同じ目で、同じ表情で。

彼らは、もはや引き返すことのできない場所に向かって歩いていた。

注 ※ 杏奈：…榊杏奈。貴子の親友で、歩行祭直前に渡米したため、歩行祭には参加していない。同じく貴子の親友である遊佐美和子とともに、

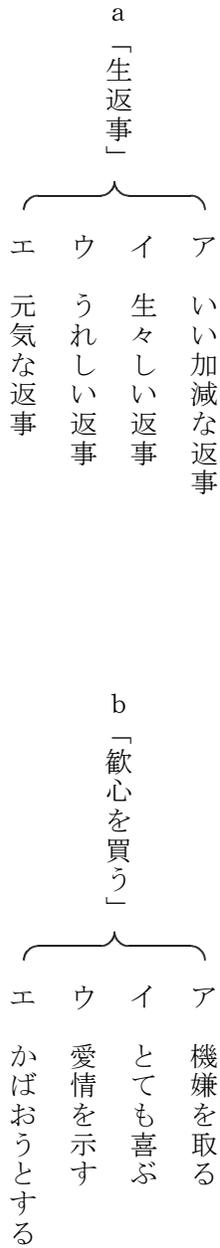
貴子の母から貴子と融との関係を知らされていた。また、杏奈の弟の順弥がアメリカから歩行祭に参加したことによって、融と貴子の関係は、融の友人の忍にも知られてしまう。

※ スタッフォード： スタッフォード大学。アメリカ、カリフォルニア州にある私立大学。

※ メロドラマ： 恋愛をテーマとした一般大衆向けのドラマ。

問一 ~~~~~線部 a 「生返事」、 b 「歓心を買おう」とありますが、その言葉の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から

選び、記号で答えなさい。



問二 ———線部① 「根拠のない不安」とはどのような不安だと考えられますか。「く」という不安。」に続く形で答えなさい。

問三 ——— 線部②「密かに恨めしく思った」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 無償の愛を当たり前のこととしか思えない融の甘えた性格が、異母兄弟であるとはいえひどく情けなく感じたから。
- イ 杏奈や美和子たちが二人きりになれるように気を遣ってくれたのに、それを当たり前のように思っているようだから。
- ウ せっかく二人きりになれたのに、融と話していると、友人たちを暇な人扱いするし、悪口しか言わないから。
- エ 融のことが大好きで、やっと二人きりになれたのに、自分の好意を全く理解していない様子の融に苛立いらだったから。
- オ 杏奈や美和子が仲直りをするために二人きりにしてくれたのに、融には仲直りをする意思が全く見受けられないから。

問四 ——— 線部③「新たな憂鬱の始まり」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 融の優柔不断な態度に翻弄されるのではないかと悩んでいること。
- イ 融と気安く接している女子たちへの嫉妬が芽生えてしまったこと。
- ウ 弟を歩行祭に送り込んだ杏奈に対して疑念が生まれたということ。
- エ 鈍感に思える融とうまく付き合っていけるのかという不安が生じたこと。
- オ 融のひねくれた性格について次第に嫌悪感を抱き始めたということ。

問五 ——線部④ 「融は自分が情けなく、恥ずかしくてたまらなくなった」とありますが、「融」はなぜ「情けなく、恥ずかしく」なったと考えられますか。その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 杏奈のことを本当はとても好きであったのに、恋愛対象でないなどと自分に言い聞かせていた自分が情けなかったから。

イ 自分を叱ってくれた友だちがいたのに、それにさえ無関心であり続けようと強がっていた自分があまりに幼稚であったと気付いたから。

ウ 自分のことをとても思ってくれた友だちがいたのに、彼らをいつも見下したような態度を取っていた自分を未熟に感じたから。

エ 杏奈や貴子たちが言ってくれたことの方が正しかったのに、それに反発してしまった自分が大人げないように感じられたから。

オ 誰よりも早く大人になろうとしていたのに、自分の正直な気持ちにさえ気付かなかった自分のことを幼く感じられたから。

問六 —— 線部⑤ 「貴子は、あきれて笑い出したくなった」とありますが、このときの「貴子」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 高校生活を真面目に振り返る融を見て、もはや戻らない過去を後悔することなんて、筋違いなことだと思っている。
- イ 融が高校生活について愚痴を言うのを聞いて、いつもは偉そうにしているのに、案外自分に自信がないのだなと思っている。
- ウ 青春時代を取り戻したいという融の発言を聞いて、現実をわかっていないとちよつと馬鹿にした思いにかられている。
- エ 完全に満足する高校生活を求める融の子どものような不満顔を見て、少しは可愛かわいいところもあるのだなと感じている。
- オ 高校生活を本気で後悔しているらしい融の表情を見て、融は本当はとても純粋なのではないかと思っている。

問七 —— 線部⑥ 「融は納得した」とありますが、このとき「融」は何を「納得」したのですか。二十字以内で説明しなさい。

問八 —— 線部⑦ 「目には見えないが、全く同じものを」とありますが、ここで言う「全く同じもの」とはどういうものと考えられますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 兄妹二人、これからは力を合わせて、今後訪れるであろう苦難に立ち向かっていこうという決意。
- イ 兄妹二人きり、不確定な未来について考えるよりも、お互いの「今」を大切にしていこうという決心。
- ウ 歩行祭が終わったあとも、兄妹として愛憎の入り乱れた思いで過ごしていくであろう未来。

エ やつと言葉を交わすことができ、仲良くなれたことから、もう孤独に陥ることのない明るい人生。  
オ 言葉を交わし、互いに存在を認めてしまつては、もはや以前の適度な距離感には戻れないという予感。

問九 この文章に関する説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 歩行祭という行事で二人が道を歩いているシーンが続くが、後半で二人が歩いている道は、実際の道であるだけでなく、二人がこれから歩むであろう人生を象徴的に暗示している。

イ 高校最後の行事に参加する全く違う性格の兄妹を描いているが、人間とは血が繋がっていれば、誰でもわかり合えるものであるという人間関係の容易さが示唆されている。

ウ 歩くという行為は単調ではあるが、一歩一歩足を踏み出すように努力を積み重ねていくことで、人は理解し合えるという道徳的な側面のある小説に仕上がっている。

エ 参加者全員がゴールを目指して歩ききる歩行祭という行事を描くことで、どんな困難があつても人間は自分の人生を全うしなければならないという真理を巧妙に物語っている。

オ 人が歩いていく道には常に方向があるが、人は誰も自分の思い通りの方向に歩むことはできないという絶望感が文章全体に漂っており、それが後半では特に明確にあらわれている。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 今は昔、六十代延喜えんぎの御時おんときに、寛蓮かんれんといふ僧、碁ごの上手にてありけり。寛蓮は品もいやしからぬ人にて、宇多院うただいんの※殿上てんじょう法師にてありければ、※内にも常に呼び給ひて、碁を遊ばしけり。醍醐たいご天皇もいみじく上手に遊ばしけれども、負けさせ給ふこと多かりけり。

② 常に遊ばしけるほどに、金の御枕かひものまくらを賭物かひものにし給ひて、天皇負けさせ給ひにければ、寛蓮、①その枕まくらをいただきてまかり出でむとするを、若き殿上人いに奪うばひ取とらせ給たまひにければ、aかやうかやうにいただきてまかり出づるを奪うばはせ給ふこと度々たびたびにぞなりにける。

③ しかる間、なほ天皇負けさせ給ひて、寛蓮そのA御枕おんまくらをいただきてまかり出でけるを、前のごとく若き殿上人あまた追ひて、ii奪うばひ取とらむとする時に、寛蓮懐なごころより枕まくらを引き出でて、町の井iiiに投なげ入いれつれば、殿上人は皆去りぬ。寛蓮はbをどりてまかり出でぬ。その後、殿上人、井に人を下ろしてそのC枕まくらを取り上げて見れば、木をもって枕まくらに造りて、金の箔はくを押したるなりけり。早く、実の枕をば取りてivまかり出でにけり。さる枕を構へて持ちたりけるを投げ入れけるなりけり。

④ さてそのD枕まくらを打ち破りて仁和寺にんなの東の辺にある弥勒寺みろくといふ寺をば造りたるなりけり。天皇も、②いみじく構へたり」とてほほゑませ給ひにけり。

(『今昔物語集』より)

注 ※ 殿上法師：天皇の住まいに出入りすることを許された法師。

※ 内：天皇と妃きさきたちの住むところ。

問一 〜〜線部 a 「かやう」、b 「をどり」を現代仮名遣いに直し、**すべてひらがな**で答えなさい。

問二 〓線部 「奪はせ給ふこと度々にぞなりにける」で用いられている古文特有の決まりを何と言いますか。答えなさい。

問三 [1]の場面から読み取れる内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 寛蓮と碁で遊ぶために、醍醐天皇はしばしば寛蓮のところところに遊びに来ていた。

イ 醍醐天皇も碁を打つのは上手だったが、寛蓮にはなかなか敵かたわなかった。

ウ 寛蓮は僧であり、政治的権力を持たなかったため、醍醐天皇と顔を合わせたことはなかった。

エ 醍醐天皇は碁がとても下手で、寛蓮はいつも天皇に対し手加減をして碁を打っていた。

問四 ……線部 i、iv の動作主（主語）を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上使用してもかまいません。

ア 寛蓮                   イ 醍醐天皇                   ウ 宇多院                   エ 殿上人

問五 ——線部①「その枕」と同じ枕を指しているものを、本文中の——線部 A、D の中から**すべて**選び、記号で答えなさい。

問六 ——線部②「いみじく構へたり」とは、「よくやったな」や「でかしたな」という意味ですが、これは誰がどのようなことについて言っていますか。四十字以内で答えなさい。



【一】

問一 a つつみ b 鑑賞 c 冒頭 d いけい e 訴え

問二 A ウ B イ C ア

問三 日本人が尊び愛する自然。

問四 ヨーロッパの環境学者たち

問五(1) 自然に對する人間中心的な考え方

(2)

考	て	る	自
え	の	べ	然
方	命	き	界
。	を	固	に
	平	有	お
	等	の	け
	に	価	る
	扱	値	全
	わ	を	て
	な	持	の
	け	っ	生
	れ	て	命
	ば	い	存
	な	る	在
	ら	か	は
	な	ら	、
	い	、	尊
	と	人	重
	す	は	さ
	る	全	れ

問六 オ 問七 個々の生きゝ一体として捉えたもの。

問八 1 ○ 2 × 3 × 4 ○

問九 イ 問十 自然との接触が少なくなる

問十一 イ

【二】

問一 a ア b ア

問二 融が素直に話してくれるのは、今だけかもしれないという不安。

問三 イ 問四 エ 問五 オ 問六 オ

問七 芳岡と貴子の間に恋愛感情がなかったこと。

問八 ウ 問九 ア

【三】

問一 a かよう b おどり 問二 係り結びの法則

問三 イ 問四 i イ ii エ iii ア iv ア

問五 A・D

問六 寛蓮が木で作った偽の枕を  
手に入れたて、弥勒寺を造ったこと。